



「チーム霧が丘」と「ネガティブケイパビリティ(答えの出ない事態に耐える力)」

小学部副校長 岸 俊介

1月8日、1都3県に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が出されました。神奈川県については3月7日まで緊急事態宣言の延長が発出されています。学校は、感染予防対策を再徹底し、児童生徒・教職員の健康に充分留意した上で教育活動を継続しています。

振り返ると、令和2年度は緊急事態宣言下における臨時休業からのスタートでした。6月、段階的に学校を再開。小学部が給食を開始したのは7月でした。数々の行事や教育活動を見直してきました。そしてこの1月、再びの緊急事態宣言。児童生徒はもちろん、保護者の皆様、地域の皆様もゴールの見えない毎日に心晴れない日々が続いていることと思います。

「ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力(箒木蓬生 著)」という本に出会ったのは何年前か、たしか新聞の書評欄がきっかけでした。ネガティブケイパビリティ(negative capability 負の能力もしくは陰性能力)とは「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」をさします。(同著より引用)

学校は「問題解決能力」という言葉が象徴している通り、「問題が生じれば、的確かつ迅速に対処する能力」(同著より引用)を育てていくところです。例えば、算数の計算問題のような課題は「的確」「迅速」に対処できるものが多いでしょう。しかし、我々が現実社会のなかで直面する問題は「的確」かつ「迅速」に対処できるものばかりなのではないでしょうか。全ての問題や課題が的確に迅速に解決できるものだとするならば、「的確に迅速に解決できないもの」は「不安定なもの、不確かなもの」となり、焦りや失望につながっていきます。そして焦りや失望は無力感となり元気を失わせていくと考えます。

問題解決に向けて、知恵を絞り、不断の努力をしていくことはもちろん大切なことです。しかし、同時に、「ネガティブケイパビリティ」=「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」を大切にしていくことが重要なのではないのでしょうか。問題解決が進まず、自分の無力感に愕然としたとき、自分を助け、勇気づけてくれるのはこの「ネガティブケイパビリティ」なのかもしれません。

不確かなものの中で耐えるには、1人よりも2人、2人よりも3人、3人よりも……。お互いに「大変ですよ」と共感し合い、励まし合い「大丈夫」「一緒に耐えていこうね」「一緒に頑張ろうね」と声を掛け合っていくことが大切なのではないでしょうか。思えば「チーム霧が丘」はすでにそのような声掛けにあふれていました。この1年、失われたものも多かったかもしれませんが。しかしこの力を高めた、あるいは「チーム霧が丘」の力の高さを再確認した1年と考えると、実り多き1年であったといえるのかもしれません。